



頌春 二〇〇二元旦

歳旦三つ物 東 明雅

懸けならぶ絵馬に適し初日影

湯気ほのぼのとまつる若水

盆梅を獲むる鼻先近寄せて

ともかくも二人健やか老の春  
東 郁子

拝む初空神々の国  
都井岬親馬子馬遊ぶらん

市野沢 弘子

枝芸天に頼づく年の始めかな

旅の荷にさすなすな蘿菴

春の駒一際高く嘶きて

副島 久美子

嘶きの四方に響くや初日影

故武満ち満つ泛ぶ山脈

すやすやと眠るみどりご湯浴みして

内田 麻子

初日の出アボロの馬の駈くならん

バイク響かせ年賀郵便

花の宴魔女も聖女もこきまぜて

中田 あかり

富士筑波心にしかと初景色

恵方道にも瑞兆の雲

春興の閑演のベル華やかに

上月 淳子

初茶の湯着膝の膝の揃ひけり

垣の内より羽根つきの音

岬の馬草かんばしく食むならん

歳旦吟

武村 利子

凜凜と天馬翔けるや初御空

椎頭 和弥

白足袋の席得て癸止的始め

倉本 路子

過去茫茫々未来茫茫々春春の春

篠原 達子

片岡球子の富士の緞帳初芝居

長崎 和代

初旅や瑞雲靡く桜島

登坂かりん

松の内ごまめ田作りやつがしら

鈴木千恵子

天翔けるべガサス告る御慶かな

横山 わこ

書初めのなかよしの字が太々と

高瀬 美保

初菫水脈ひとすじに漁り船

加藤 浩子

初夢や天馬の翔る明けの空

鈴木美奈子

日本橋初荷伝馬の勢揃ひ

島村 暁巳

駒勇み日の矢立ちそむ初筑波

佛測 健悟

言の葉は惜しまぬ愛の宝船

鈴木 慎二

跳ね馬の黒光りする初菫

日高英二 玲

なにやらのまた生まれけり初山河

第二十二回時雨忌正式俳諧

平成十三年十月十七日

於 深川芭蕉記念館

次第

一	序政め		
二	序入り		
三	配硯	宗匠	豊田 好敏
四	献花	脇宗匠	佛測 健悟
五	執筆呼び出し	脇宗匠	橘 朱鷺子
六	文台捌き	執筆	島村 曉巳
七	俳諧興行	知司	生田 目常義
八	花前	副知司	吉村 ちみこ
九	献香	座配	鈴木美奈子
十	花の匂披露	座見	秋山志世子
十一	端作り	花司	松本 碧
十二	吟声	香元	八代 嫺
十三	文台返し	配硯	日高 玲
十四	作品奉納	同	秋山志世子
十五	納硯	同	棚町 未悠
十六	挨拶	老長	上月 淳子
十七	退席		

奉納 脇起り二十韻

「振売りの」の巻

振売りの履あはれなりまびす掛	翁
鉾懸吊す肴屋の釣	東 明雅
背文より大きなチエロをかかへるて	松本 碧
難れて歩く双子なりけり	佛測 健悟
都庁舎の窓それぞれに赤い月	鈴木美奈子
そつと挿し置く蘭の一輪	橘 朱鷺子
いとゆふに絡めどられて抱かれて	上月 淳子
惚れた男はみんな少年	八代 嫺
スクラブを求め砂漠の町に入り	吉村 ちみこ
西のはづれに骨董の店	生田 目常義
露天風呂手桶に酒と茗豆膏	日高 玲
用心棒の出番間近く	秋山志世子
白餅養生はエキストラ	棚町 未悠
夏の霜遅く大森の寺	東 郁子
わかつてるでもうれしいな君の嘘	金本 路子
杞憂に終る佳人薄命	鈴木千恵子
がたつけどトロッコ電車評判に	中林 あや
岡拓村に勇む耕牛	豊坂 かりん
花の門新大岡は賜杯抱き	豊田 好敏
夢の中にも上がる風船	執筆

脇起「菊の水」 浅賀 丁那 捌

一露もこぼさぬ菊の水かな 翁

はつかに残る邯鄲の声 丁那

等閑に玻璃戸拭く子の叱られて 志げ子

大きおむすびおかか味どれ 志世子

秋場所を勝ち越し月も白く見ゆ 秀樹

色変へぬ松紋にくつきり 洋子

結納は諸事を略して爽やかに 樹

ダイヤモンドが諍ひの種 志

泣いてゐるバーミヤンなる石仏 那

きのふもけふも降りしきる雨 世

赤足の飛べない鳥と出会ふ森 全

老残の身の泡盛を酌み 志

月皓々パインを運ぶ貨車の列 洋

ふたりの妻が帽子振ってる 世

すれ違ふ二十四時間置手紙 樹

迎撃ミサイル炸裂の夢 那

神様は何処に在はすしるしめせ 志

しらっぱくれたる海豹の面 樹

花を追ひ間宮海峡渡りけり 洋

錫を掘り出す山のかげろひ 執筆

連衆 蒲原志げ子 秋山志世子 青木秀樹

大島洋子

「しぐれけり」 池田 やすこ 捌

ゆりかもめ啼いて大川しぐれけり やすこ

朽葉を踏みてたどる細道 恭子

夢のやう入賞の夢本当に あかり

郵便受けを覗くたのしみ 千晴

望の月売れぬ館を照らしめて 健悟

三十路なかばに虫愛づる姉 全

木瓜の実に似たる男のおほ頭 あ

突っ込んで来る無謀トラック 千

ポケットにぐるぐる巻きのウイスキー 恭

風に吹かれて唄ふ王将 健

麦秋の通天閣で掬られたり 千

子供神輿へ浮かれ出す月 恭

インソップの童話にひそむ残酷さ あ

騒然の世をしぼし風狂 や

授業中援交相手さがす奴 恭

めとれぬ彼がたんとある町 あ

味付けにちよつとうるさいペット病む 千

春を蔵せる電腦の函 健

地図広げ北へ進まむ花の旅 あ

うららうららと金の耳掻き 健

連衆 式田恭子 中田あかり 福永千晴

佛淵健悟

「時雨月」 内田 麻子 捌

さまざまの神の在るらし時雨月 麻子

砂塵のなかに凍つる鐘の音 かりん

旅靴スケッチブック取り出して 清子

双眼鏡で笑顔とらへる 佐紀子

宵闇の池辺に犬と遊ぶ人 ゆみを

弟切草を干せる軒下 紀

地芝居の梶原源太に熱を上げ ん

帯ゆるやかに忍びゆく恋 清

ヴェネツィアのグラスはいつも棚にあり を

年にこだはりブドウ酒を抜く 清

DNA親を選べぬわれも親 ん

雀どこでも同じ姿に 麻

青芝に足投出して月仰ぐ 紀

竹婦人蹴り奪ふ唇 ん

お揃ひのケータイメモデー響き合ひ 紀

クローズアップ亡命の王 麻

滔々と千古の大河流れけり を

京雑江戸雑見せる街道 ん

墨磨りて虚子庵の花描きたる 清

紋白蝶のまつはれる袖 紀

連衆 登坂かりん 下鉢清子 間佐紀子

青島ゆみを

「猫洞の猫」

杉山 寿子 捌

初時雨猫洞の猫ちちこまる  
 山茶花赤く降りかかる門  
 デッサンのコンテを画布に走らせて  
 プラモ蒐集飾る脇棚  
 酒酌めば月の雫も呑み尽くす  
 付いておいでと糸遊の糸  
 煙に巻く室の八島の笑ひ茸  
 次から次ぎへと迷がすおか惚れ  
 おやはてな預金残高合はないわ  
 異境の友が苦き膾炙む  
 墨の香の新番付は五月場所  
 暑氣払ひにと歌ふ賛美歌  
 木曾谷の水を掬うて人となり  
 カルメン故郷に帰る撮影  
 抱かれてダンスフロアー冬の月  
 味噌の味する君のくちびる  
 あの頃は全てのものが美しく  
 海の泡から拾ふ白珠  
 花守はボーイスカウト指揮をして  
 単車を停める春愉し里

連衆 日高玲 豊田好敏 若林文伸

「浜町に」

鈴木 慎二 捌

浜町に時雨の色や蒸気船  
 掛大根の並ぶ軒端  
 新発売カメラ梱包解くならん  
 むりやり猫とポーズとる児ら  
 腰折りて太郎冠者なり月舞台  
 忍ぶ心に咲く思草  
 ボジョレヌーボーくどき文句のエンドレス  
 ギャルに人氣のレッグウォーマー  
 神があり仏もあつて禱りなく  
 地雷探査の器具は錆びつき  
 冷蔵庫ときどき氷落ちる音  
 海鞘に手をやく実習の月  
 はいといふだけが得意の新妻で  
 囿囿の夫の知らぬ性癖\*  
 今日もまたバゴダ詣でと家あとに  
 出待ち入待ち根気いること  
 百歳の「なんてえことはなかったな」  
 マンドリン背負ふキャプテンの春  
 散りかかる花にジョッキVサイン  
 鳥の卵をしまふ抽斗  
 \*囿囿=牢獄のこと

連衆 原田千町 山口美恵 山本要子 遠藤央子

「時雨の色」

鈴木 千恵子 捌

大川や時雨の色のいやまさる  
 冬の蜂どもうずくまる路地  
 小箆箭の棚にこけしを並べあて  
 屯所勤めもすでに七とせ  
 盃の月の欠けさへゆらゆらと  
 草泊りにて獲たる少年  
 いにしへの美男蔓も負け続き  
 狂言打って稼ぐ汽車賃  
 何もない砂漠の果てに砂金掘り  
 聖者の行進くり返し聴く  
 ノーベル賞学者好みの鮭の店  
 箱眼鏡にて海女覗く月  
 竜宮にある筈がない露天風呂  
 君の心を巻きもどす術  
 黄昏のロンドンブリッジ・ウィヴィアン・リイ  
 絹靴下を履いてテロルす  
 これよりは卓球三昧あきもせで  
 浮かれた猫が中空に飛ぶ  
 花朧爪先上りの坂の道  
 挨拶すれば山笑ふ朝

連衆 東明雅 生田目常義 武村利子 八角澄子 椿紀子

「風羅にも」

鈴木 了齋 捌

風羅にも重さ軽さや桃青忌

了齋

行方定めず落葉舞ふ頃

朱鷺子

一輪車乗れた得意の笑みならん

淳子

男の子にも必須家庭科

志乃

月光にグラスリッソエン描きみて\*

嫺

鳥渡る下ゴンドラの漣

淳

菊枕君の残り香紛れなく

斎

侏儒の恋する幽閉の姫

淳

声色もDNAがあらはれて

嫺

親の意見はみんな素通り

朱

土用波寄せまた崩れ地震の島

志

夏越神楽の笛のひと吹き

嫺

どっかりと動きたがらぬ犬を引く

朱

墮落論読むメノポーズなり

嫺

寝乱れの床を凍月照らし出し

斎

見直すほどに形佳き髭

朱

降り来し槍も煙りて河童橋

淳

ちよつと浅酌たたみいわしで

嫺

「花咲かば」と小謡聞こゆ垣の外

淳

灯火ほのか揺るる春宵

執筆

\*ダイヤモンド粉を付けた特殊なペンで硝子面を削り絵柄を描く芸

連衆 上月淳子 八代嫺 橋本朱鷺子

宮内志乃

「小名木川」

副島 久美子 捌

冬浅しさざなみ光る小名木川

久美子

残る虫鳴く石垣の間

郁子

フルフエース抱へ少年集りて

佳子

何の鍵やら束にして提げ

暁巳

烏瓜ぶらりぶらりと月も揺れ

碧

「もうちよつとだけ」送る宵闇

靖子

ほんのりと酔うて新酒を口うつし

之

浮世草子の英訳がなる

巳

中宮寺弥勒菩薩のお旅立

郁

一弦琴で復元の曲

碧

見はるかす鳥賊釣舟の連なりて

郁

裸子を追ひ月影の道

之

野依教授むかし腕白ノーベル賞

郁

志ある男嗅ぎ分け

碧

糟糠の妻より悪女の方がいい

巳

映画試写会泣いて笑って

靖

真珠湾早やもう既に六十年

碧

穂の芽明日葉みなの好物

巳

花吹雪太極拳は無我の境

靖

こじゆけい走る学校の裏

之

連衆 東郁子 染谷佳之 島村暁巳

松本碧 関口靖子

「無沙干場」\*

高橋 豊美 捌

秋風の吹くばかりなり無沙干場

豊美

汽笛はるかに渡る初鴨

弘子

檀紅葉彩取り合はせクラージュに

美奈子

独り占めする高層の月

利子

たどたとと数を数へる湯ぶねの児

如代

愛妻弁当けふは休みか

豊

首筋にくつきり残るキス・マーク

弘

ブロードウェイのネオン煌く

奈

闇汁に希望も愚痴もぶちこんで

利

瓢くりぬきつくる炭斗

如

山里の郵便局長名士なり

豊

犬三匹に猫が六匹

弘

姉妹に出生祝ひのベビーカー

奈

デイナーの後は「夜間飛行」で

利

桑の実に爪まで染めて鬼女の月

如

新発意揃ひ勤行の声

豊

チベットのホームステイを夢に見て

弘

よなほこりする小包の箱

利

夕映えに盃かはす花の今

奈

春のシヨールを肩にふはりと

如

\*むしやかんじょう北海道、玉石を敷いた広大な昆布干し場

連衆 市野沢弘子 鈴木美奈子

梅田利子 伊勢本如代

「軽みの足らぬ」 中林 あや 捌

翁忌や軽みの足らぬ顔洗ふ

火燵の上にのびのびと猫

一輪車児童公園巡るらん

ジーンズばかりボランテアたち

ハイテクのシステム狂ふ窓へ月

香具師の彼女がくれたべつたら

紅葉狩り合はせて姿消し

待ってゐるのにひけぬ都市瓦斯

応接間額におさまるおしら様

小泉総理改革の岐路

夏めけばアフターファイブのジャズダンス

月によるしき缶のチューハイ

片べりの宿下駄をはく姉妹

をぢさんみたいな彼を横どり

だきあげた君の重さにたじたじと

経に手加減菩提寺の僧

また見てる朝はシアトルマリナーズ

囀る鳥にコーンフレーク

学会の友より届く花の文

橋の向うは陽炎の駅

連衆 久保田庸子 近藤守男 倉本路子

棚町未悠

「手ざはりや」 日高 英二 捌

手ざはりや時雨忌に買ふ時刻表

地下鉄出でて冬ぬき街

ゴールキーパー獣めきたる構へにて

三々五々と帰る泥シャツ

高原の月は無情の光帯び

齧られてゐる蠶螂の恋

奥向きへ男入る、か後の難

人払ひして渡す賈ドル

神頼みアラは何と聞こし召す

歪んだ馬穴ころがつてゐる

冷酒に足を取られて四つん這ひ

夜風涼しきポンペイの月

分限者も元をたゞせば洗濯屋

卸多くてじれる軍服

カルメンの楽の音遠く澄み渡り

旅愁か、へてまた越える山

定年後自動車整備など覚え

二日やいとに身をいとふ父

無雑作にばさと活けたる花の枝

鮎田楽にかぎろへる川

連衆 篠原達子 坂本孝子 荒川有史

佐古英子

○第一回源心コンクール入選者発表

第一回源心コンクールは十月三十一日締め切れ、予想よりも遥かに多い八十四編の応募を頂き有難うございました。

十二月二十一日、明雅先生、千町宗匠お二人の選考の結果、次の作品が入選いたしましたので、ここに発表致します。

特選 (作品名、アイウエオ順)

「坂の街」 坂本 孝子

「月に歌ふ」 鈴木美奈子

入選

「秋拾」 倉本 路子

「サンバノ逝く」 棚町 未悠

「宮益坂」 鈴木 慎二

佳作

「雉鳩」 梅田 利子

「魁て」 長崎 和代

「月の岬」 高橋 豊美

「土用入り」 鈴木千恵子

「福姫」 豊田 好敏

「忘れ帽子」 市野沢弘子

源心庵の会

執筆奮闘記 島村 暁巳

平成十三年「時雨忌」の執筆をと事務局から伺った時、あまりの重荷にすぐ辞退したが、先生のお許しが頂けず御引き受けすることになった。正式俳諧の重さを考えると身が震えるほどの大役である。さっそく先回の執筆を勤められた青木秀樹氏の手引きで準備に取りかかったが、最初から難問続出。青木さんはまず「正座と歌膝の稽古をすぐ始めなさい、これが肥満体には一番難しい」とアドバイス、それからはなるべく椅子から下り正座で過ごすように務めたが、正座ひとつとっても頭で考えているのとは大違いで座布団は敷けないことや、執筆の座だけでなく冒頭の席入りから宗匠に呼び出されるまで正座した後いかにスツクと立ち上がれるかが重要であることも稽古の直前まで気付かぬ有様で、かなり慌てた。ビデオテープは、故桃径庵和子宗匠のものとは佛淵健悟さんのものを拝借し何べんも拝見した。和子宗匠の優姿に涙すると共に、見れば見るほど自信を喪失してゆくのには正直参った。あつという間に稽古の当日を迎えたが執筆の座に辿りついたとトタン頭の中が真っ白になり、手順もつぎつぎ飛んでしまい塗炭の苦しみ、先生も呆れ顔で批評の言葉も無

い有様、まさに穴があれば入りたい心境だった。その日は二十韻の捌もそこそこにはうの体で辞去し、大川端をとぼとぼ帰る。この日が今回の執筆準備の日々の中での心境のボトムだったろう。稽古の日から当日までは二十日あまり、心機一転稽古にと言いたいところだがそうはいかない。当日の二十韻の準備やら配布資料の作成やらの付属事項にも結構時間をとられ中々稽古が進まずちよつと焦る。その間に源心庵お月見の会、学校と職場の同窓生旅行で四日間留守など日は飛ばすように過ぎてゆく。B型の特長らしいのが予定を変更できない性格が災いし、すべてキャンセルなしで消化してしまう。今振り返ると甘かったと大反省だ。どうか以後執筆をなさるB型の方はご注意ください。結局付けが大晦日に廻り前日まででんやわんやの忙しさ。

当日は抜ける様な秋天、六分の勇氣四分の自負で深川着、あつという間に直前稽古は終る。その稽古でも失敗続きで冷汗三斗、先生は渋い顔、あとは本番に全力投球あるのみ、ただし肩に力を入れず沈着に、と思うものの喉はカラカラでおぼつかない。後は御覧の通り大過なく終ることができたが、小過は沢山で反省しきり、先生は何とか合格とおっしゃってくださったのでやれやれで、ここで肩の力が抜ける。打ち上げでは美味しい御酒とやさしいなぐさめにつつまれ夢心地でご帰館。その夜から二日は昏々と眠る。

先生をはじめ沢山の先輩、ご同輩のおかげ様で執筆という大役を何とか勤め上げた今思うことは、「執筆とは連衆の醸す『座』という得も言われぬ暖かい結界の中での進行役、狂言回しにとどまらず、翁と対話し和歌三神のしもべとしての充実感に身を包まれ至福に至る素晴らしいものなのだ」という感動と深甚の感謝である。

ご指導ご鞭撻と励ましの言葉を頂いた上さまさまのお手伝いも頂いた沢山のご連衆に心から御礼を申しあげます。振り返れば今回の正式俳諧は芭蕉記念館新装後の第一回であり、来春の藤祭は普公の千百年祭である。誠に有難いめぐり合わせであり、今後とも和歌三神のご加護を信じこの道に精進することをあらためて誓う。

翁忌の歌膝解けば樞声かな 暁巳





伊那の馬場凌冬 根津 芙紗

高遠の歴史博物館に立ち寄った時、阪本天山を頂点とする系図の中に、祖父根津芦丈の師である馬場凌冬の名を発見した。高遠藩の学問所である進徳館に学んでいたのだ。立派な先生ということは聞いていたが：：：なんだか背中を押された思いがした。それにしても伊那から高遠まで三里もあるのに毎日何で通ったのだろうか。中馬や伝馬を利用することは出来ないし、進徳館の図面には寄宿舎があるがそれも時の幕府に報告のための作為であったらしい。凌冬を知るには阪本天山にまで遡っていくようだ。天山の父は「学問や文学を盛んにして風俗を改めるように」といって天山を励ましたと伝えられている。そのため文武両道に励むようになり儒学・医学を主とした高遠学問の基礎が築かれた。それにしてもどこかで江戸や京都との接点がないとこんなに俳諧が盛んであったわけがないと思つた。二十六才のとき天山は時の藩主内藤頼由に従つて江戸に出た。一流の学者の薫陶を受け名

た流れをくむ進徳館が中村元起によって設立されたのであった。

凌冬の家は祖父・父と三代に亘り俳諧を嗜んでおり家庭環境は申し分なかった。凌冬は中村元起に経史を学び書法や数学も会得し自ら円熟学校を作り子弟の教育に当つた。若いうちから俳諧にも志し、加賀の空羅について連句の手ほどきをうけた。月の本為山や橘春湖の始めた教林盟社に入り、その分社として円熟社を起こした。妻のなみめも大の俳諧好きで両吟を運ぶという熱の入れようであった。それに布精、菊園が加わり四吟百韻等を作り立派な風交ぶりに凌冬の母からも「俳諧というものは誠に結構なものである」と言われたとのことである。この頃より公職を辞し、泮水園芹舎をたより上洛した。芹舎は海内一の宗匠と言われた人である。客人門人の集る中で凌冬夫妻も孜々と努めたらしいが何分にも染み付いた田舎俳諧が災いし、止めたい旨を芹舎に申し出たところ「難しいことが分かればそれだけ修業が進んだのであるから一層勉強せよ」と諭されたと、弟子たちに包まず話したことが伝えられている。

の賀筵の際には執筆を仰せつかり、その技量もみごとなものであった。この年芭蕉二百回忌が義仲寺で営まれ凌冬一行も参列した。また奇人井月の「名残の水茎」に序文を書き、何かと井月の世話をしている。宗匠冥利に尽きる充実した頃だったと思う。

凌冬は農家の生まれであり養蚕の仕事をするかたわら俳諧をしてきたので、六十までは働きその後俳諧に没頭すると宣言していたのであるが、明治三十五年九月五日の円熟社の例会に出席、運座の評から連句の擲きまでやり機嫌よく帰宅した翌六日、脳溢血で天外に去つた。突然の死に門人たちの落胆ぶりは痛々しいほどであった。手帳の最後の句は

遠里や砧がやめば灯も見えず  
であつた。いうまでもなく、いづれの方面からも凌冬先生、凌冬先生と尊敬される偉大な人格者だったのである。芹舎翁の教えを忠実に守り、また学識者でありながら連句にも俳句にも自慢することなく奥ゆかしい限りであったと伝えられている。

幕末の代表作として次の表六句を挙げて置く。

大海や晴れ行く霧のまち遠き  
はその時の句である。

その後、西国行脚始めとし、武生、金沢、魚津、松代、松本と大団円の旅をしたり、風交する人も夥しく凌冬のもっとも高潮した時期だったという。明治十七年、芹舎翁の八十

梶の葉や最う戻り来る手習子  
残暑を凌ぐ庭の打水  
織筵月の支度の調ふて  
俵の外へ回る米虫  
頼母子の銭呼びあふ両隣  
冬至此方降りつゞく雨

凌冬  
井月  
布精  
冬  
月  
精

忘れられない付合 3

付合の源流に遊ぶ 古賀 一郎

元禄六年、芭蕉五十歳、杉風四十七歳、七夕の夜は雨だった。

高水に星も旅寝や岩の上 芭蕉

七夕にかさねばうとし絹合羽 杉風

後選集小野小町、僧正遍照の本歌取である。

岩の上に旅寝をすればいと寒し

苔の衣を我に貸さなむ 小野小町

世を背く苔の衣はたゞ一重

貸さねばうとしいざ二人寝む 僧正遍照

苔の衣が絹合羽に化ける洒落が楽しい。王朝時代の相聞歌を踏まえたこうした趣向に出会うと、俳諧の付合の源流の深さを感じさせられる。

王朝時代の相聞歌は恋が多いが、時に生活の憂を垣間見せ苦笑いさせられることもある。

暁月が師走の果のそら印地

うち越さん石ひとつ給べ 暁月坊

さだいへが力の程を見せんとて

石を二つに割りてこそやれ 定家

石ひとつとは米一石の事である。暁月坊は定家の弟、師走困窮して石ひとつを兄に無心した。定家はそれを値切つて石を二つに割り、米五斗を贈った。この贈答歌を本歌取りして、芭蕉が進物の札状を書いているのも面白い。

「元禄四年閏八月十日付芭蕉書簡」である。『夜前はどっかりと米式斗、定家が力のほどみせんとて石を五ツに打ちわられ候。薪炭さまざま御意懸被り浅からず、随分打寄り賞翫致すべく候。脇珍重、第三御回しなされ候。』(後略)

絵師英一蝶は元禄十一年幕府の怒りに触れ三宅島に流される。蕉門の俳人と俳諧にも遊んでいた一蝶は、島から其角への便りに

初鯉芥子の無くて涙かな

の一句を詠む。その返書に其角は

その芥子有つて涙の鯉かな

と返した。「芥子」に象徴された江戸とその文化、望郷の念がひしひしと迫ってくる。其角の返句も心憎い、芥子有つて涙を誘うのだ。芥子は、其角の五感ではなく、心に直に迫ったのだ。江戸時代鯉の菜味は芥子だったのかと、変なところに感心しながら、心に残る贈答句である。

米国の詩人エズラ・パウンド(1885～1972)は、二十世紀の初頭ロンドンで活動した詩人のグループ・イマジストの中心にいた。そして荒木田守武の発句「落花枝にかへるかと思れば胡蝶哉」と出会った。

彼はその時の感動を「単一イメージの詩とは重ね合わせの形式、つまりあるアイデアを別のアイデアに重ねるといふ形式である。地

下鉄でわき起こった感情によって追い込まれた袋小路から抜け出すのに、これが役に立ったのだ。私は三十行の詩を書き、破つて捨てた。

それが我々の言うところの二流の強度、鮮明度による作品だったからである。六カ月後、私は半分の長さの詩を書いた。一年後、次のような発句に似た二行詩を書いた。」と言っている。

群集の中にこれらの顔があらわれる  
濡れた黒い枝にはりついた花びら

四百年の時を隔てた西洋から日本への挨拶である。

連句の付合も挨拶のはっきりしているものが心に残っている。

発句

時節さぞ伊賀の山越え華の雪 杉風

脇

身は爰元に霞む武蔵野 芭蕉

この歌仙の挙句は「ここにも上野国もとの春」と結んでいる。

芭蕉三十三歳、杉風三十歳の両吟歌仙。伊賀への帰郷の旅のはなむけである。

小春日の音を外したチンドン屋 一郎

子猫が産まりました 井上 蘭石

四匹です。お父さんはロシアンブルー、お母さんはアビシニアンです。お母さん似の茶色いのが三匹、お父さん似のブルーのこが一匹です。皆額にMの字マークと頬に縞が入っています。Mはマホメッドとの契約の証と言いますが、内容はきつと『一生だからなら過ぎて良い』でしょう。

アビは男の子のはずでした。血統書も雄と成っていましたし、開店以来一番やんちゃで折り紙つきの男の子だったという話です。獣医さんに見せると、尻尾を挿んでしげしげと覗き「あつタマがない」女の子という診断書を貰いました。ですから二匹がカップルになったとき一番困ったのは出産のことでした。

種類の違う純血種の交配は良くないこととされていきますので。半年経って去勢・避妊手術の相談に行ったところ、一度は発情させてやらないと雄猫は特に下部尿路疾患に罹りやすいので大人の身体になる一歳まで手術は見合わせる事になりました。異種交配を懸念する私に、獣医さんは明るく「どんなコが産まれるか楽しみですね」と励ましてくれました。

内気なロッシーに対し、何時でも堂々と自己アピールを繰り返すアビは毅然とした美猫です。胸元の白い毛は表情を明るくし、嫌でも顔に視線が行きますし、目蓋の際のアイラ

インはクレオパトラの様です。それ故キツイ顔立ちで、ほわんとした和猫が好きな私としては少々重荷と感じていました。ところがあつ朝うるうるとした瞳で見つめてくる。もしやと思ひ確かめると乳首が桜色になり張っています。匂い立つように美しく慈しみの充足感で輝き、赤味の足りなかつた毛並は明るさを増しています。母になることは、こんなにも幸せなことですね。

お産は驚く程軽くて、拍子抜けする程でした。猫の飼い方の本には、逆子や、陣痛が微弱で長時間苦しむケースや、子猫の世話を全くしない猫のことが出ていました。その場合飼いが助産をしてやらないといけません。臍の緒を切ったり、羊水を鼻や喉から吸出したりとまあ大変な項目が並んでいるのです。

出産予定日が今ひとつ確定できず、またわりついて来るアビに頑張れといひながら出勤する日が続きました。ある晩、残業中の私に夫の鶴鳴から「産まれたよ」と電話が入りました。帰宅した鶴鳴にロッシーがニヤツニヤツと鳴いて妻の異変を知らせたのだそうです。何事かと駆け寄るとすでに第一子が無事にお乳に吸い付いていたそうです。三十分ごとに陣痛が来て、一匹産まれると子供を舐めてきれいにします。まだ目の開かない子猫は自力で母猫のお乳を探し当て生まれて始めての乳の味を知る。三十分というのはそうした儀式をするのに必要充分な時間で、鶴鳴は遠巻きに

しながら自然の摂理の偉大さに驚いていたそうです。

父猫には自分の子という意識はない様子です。母と子の緊密な世界から疎外されているのが辛いらしく、ウギョーと叫びながら家の中を駆け回る日々が続きました。産屋の中の子猫たちをおおずおおずのぞくだけ。ある時ロッシーの姿が見えませんが、探すと産屋の中で、妻猫の胸に顔を押し当て、子猫と並んで甘えていました。幼児退行してしまったような感じでした。

一ヶ月たつと子猫達が歩けるようになりました。ロッシーは子猫とじゃれて遊びます。さながら動くネズミのおもちやといった感じでもとも幼児に対する扱いとは思えません。母親は放任主義のようであり、子猫がミウウと鳴き声をあげると走りよって救出にきます。また、うろろうろと歩き回る子供達に目配りをして、危険な所に近づくとくわえて連れ戻す。お母さんつていいなあと思いました。

ロッシーは育児疲れの妻の脇でふにやあとした顔で眠っています。何もしない。ただ寝ているだけ。アビは授乳しながら夫の耳をなめてきれいにしています。猫の時間は穏やかで、生きていることの嬉しさを静かに主張しています。

Mの字の並ぶ額の恵方かな

蘭石

季語の風景 2

佛淵 健悟

春夏秋冬の区切り方には、①天文学上、②気候学上、③節切り、④月切り、等の分け方があり、まとめると次のようになる

①	春分 夏至前日	夏至 秋分前日	秋分 冬至前日	冬至 春分前日
②	三月 五月	六月 八月	九月 十一月	十二月 二月
③	立春 立夏前日	立夏 立秋前日	立秋 立冬前日	立冬 立春前日
④	旧暦一月 三月	四月 六月	七月 九月	十月 十二月

③節切りは二十四節気の節による区切りで、春分点を起点に黄道（地球上の太陽の軌道）を二十四等分し、季節を分ける。歳時記はおおむねこれに依っている。生活実感としての四季は①、②の分け方を自然に感じる人が多いと思うのであるが、歳時記的な分け方とのギャップは、度々「季語の見直し」を押す声につながっていく。

この二十四節気を更に細かく分けたものが七十二候で、五日ごとの時候の推移にユニークな短文を付したものである。「鷹化して鳩となる」、「田鼠化して鶉とな

る」、「半夏生」など、歳時記でおなじみのものもあるが、面白いのは、七十二候のうち七十二は鳥に関する表現であること（大衍曆・宣明曆）。季節の変化・推移を記述するのに鳥の生態に着目するのはごく自然なことであつたに違いない。

我々が用いている歳時記にも、季語となつた沢山の鳥類が現れる。鳥にも渡り鳥、留鳥の分類学上の違いがある。留鳥は、漂鳥という言い方もあるように、同じ場所に留まっているわけではなく、季節に従って国内を移動し、時々によつて様々な表情を持つている。その特徴のどこに着目するかで季節が変わってくる。そうしてこの留鳥の季節が相当ブレており、歳時記利用者（編集者）の悩みの一つになっている。ちよつと突き合わせてみても以下のようなのである。

眼白 三秋 三夏 三夏  
 菊戴 三秋 三冬 三春  
 頬白 三秋 晩春 晩春  
 （上段より『新歳時記』虚子編、『季寄せ』山本健吉編、『新日本大歳時記』講談社編）

どうしてこのような違いが起きてくるのか、次回からこのあたりを考えてみたい。さいわい、新年の鳥の季語は「初声」「初鶏」「初雀」「初鴉」「初鳩」などとあるが、この明快さほどの歳時記も変わりなく、争いのタネがないのは新年らしくてめでたい。

◇猫養会案内◇

○ 藤祭奉納正式俳諧

日時 四月二十五日（木）十二時より

正式俳諧の後、二十韻興行

場所 亀戸天神

江東区亀戸三十一六一

○ 猫養会新会員

横山わこ 大矢房子

○ 猫養会基金へのご協力

一万円 原田千町

一万円 島村暁巳

編集後記

なんとか三回目の出版に漕ぎ着けた新米の編集者、なお一層楽しい誌面にするために短い「俳文」を募りたいとおもいます。多数集った場合は次回まわしということになるかもしれませんが、技痒に攻められる折々は、どうぞ一文を草してお寄せください。

季刊 「ねこみの通信」第四十六号

発行者 猫養連句会

編集人 日高英二・玲

世田谷区代田三・十九・八

〒155・0033

印刷所 アート工業株式会社